

哀しいワルツ

Sibelius に寄す

コーヒーの香りがふらりと姿を現わす
ちょこなんと、そしてにっこりとする

(それとても、ねえ、そうだろう?)

「そっと歩いてごらん、そっとね」
「でも、僕、こんなに醜いのだもの」

(ほら、ね、手を振ってる・・・さようなら、って)

窓の外のほの青い雪原にひとつの背中
振り向いてくれない、ああ、行ってしまおう

(そんなにも遠いのかしら、あの国は?)

「暖かいね、ここは、そして 淋しいね・・・」
「そうさ、だって僕は死ぬのだもの」

(泥炭を流れる水の美しいこと)

誰かが踊り出す、微笑んでいる
広さと重々しさの上で、ゆったりと流れる

(僕だって・・・僕だって・・・)

「何故、泣いちゃいけないんだい?」
「いいのさ、君はもっともっと生きるのだもの」

(何処までも平坦で、何処までも同じ)

静かに沈んでゆく足音、そして
そして薄れてゆく夜

(ほら朝が来る、春の予感)

「ほら、夜明けが来るよ」

「そうだね」

「どうしたの？手を離しちゃだめだ、
いけない、行っちゃだめだ、行っちゃ・・・」

(これでいいんだ、これで・・・)

薄れてゆく　　夜
白みはじめる　　空

(これでいいんだ、これで・・・)

(1984.10.12)